

## 現代英語に於ける動名詞構文について

鏑 木 光 朗

英語における動名詞は古くは分詞と形においても意味においても区別があったのであるが、現在において両者間に何らの区別がない。即ち何れも動詞の原形 + ing の形をしている。しかし意味においては、やはり区別がある。即ち動名詞は名詞的意味を有し、分詞は形容詞的意味を有する。従って、動名詞を *vesbal-noun*、分詞を *verbal-adjective* という名称で呼ぶこともある。

さて動名詞は名詞的意味を有するものであるが、分詞と同様にその形は動詞の原形 + ing であり、動詞の意味も強く含んでいるといえる。

このことは動名詞が目的語を後に支配したり、having + 過去分詞（動詞）の如き完了形を有したり、being + 過去分詞（動詞）の如き受動形を有したりすることによっても察知されるのである。

即ち動名詞には名詞的要素と動詞的要素とを同時に含んでいるということが出来ると思うのである。ただその何れの要素が強いかは個々の動名詞の形を見なくては決定されないと思う。G.O.Curmは動名詞は古くは *verbal-noun* であり、名詞的要素が強かったが、現在では動詞的要素が強くなって来たと述べている。(Syntax p.483) しかし一般に学校文法に於て、動名詞といって、我々が問題にしているのは、前述の如く動詞的要素を多く有し、意味だけが名詞的になっているもののことである。即ちその例を挙げると次の如きものである。

Seeing is believing. (主語及び補語) / I began seeing the sights. (目的語) / I am fond of teaching. (目的語) / He gave up his favourite pastime-reading. (同格語) 以上の各文においては動名詞は名詞的意味を有すると同時に、名詞的役目（文法上の役目）を有している。即ち文の主語、補語、目的語になっている。更に動詞的役目も有していることは、個々の意味を考えれば自然と分るのである。これらは問題なく動名詞の普通の形であるが、次に動名詞の前に何らかの語 (word) が附いて、動名詞を形容している場合について考えて見よう。普通動名詞の前には名詞の主格 (subjective case) 又は代名詞の所有格 (genitive case) が附く。これを動名詞の主語という。例えば You must acknowledge *his* being careless. / He is sure of *my* succeeding. / I don't approve of *my son* doing that.etc.

名詞が動名詞の主語になる時も元来所有格が用いられたが、次第に主格が用いられるようになったのである。さて前述の如く、動名詞の前に附く語 (名詞、代名詞) は動名詞の含む動詞の動作、状態の主体となるものである。それ故、先に動名詞の前に附く語 (名詞、代名詞) を動名詞の形容語といったが、正しくは形容語ではないのである。

それでは動名詞の前に附く形容語はないのであろうか。このことは後述することにする。先に動名詞は形は動詞であるが、意味は名詞的であり、名詞と同じ役目 (文法上) を有している。即ち文の主語、目的語、補語になると述べた。それ故、次に実際の例文を挙げて以上のことを説明することにする。

## I 文において主語として用いられた場合

- (1) The buildings of the Egyptians show that they had great skill.
- (2) Seeing is believing.
- (3) Seeing involves the interpretation by the brain of the image.
- (4) Too small an opening allows insufficient light to enter.
- (5) When we are asleep, the breathing is less rapid.
- (6) A tired feeling comes on.
- (7) Sleeping and Waking are due to changes in the blood.

以上の例により考えると、動名詞が主語として用いられた場合は名詞的要素が強く感ぜられる。(1)の場合、buildingは元來動名詞であったが現在では殆んど普通の名詞と同様に用いられているので問題はない。又(6)のfeelingも同様で、この場合「感情」という名詞の意味である。それ故、feelingの前に形容詞tiredが附くのである。更に(4)、(5)の場合も同様である。それではその他の(2)、(3)、(7)の場合は如何であろうか。これらの場合には動名詞の前に冠詞や形容詞を附けないので純粹の名詞とは考えられない。普通に用いられた動名詞であるといえる。

従って動名詞本来の意味(～すること)を表わしている。但しこの場合、(3)においてseeingを「見ること」という代りに「視覚」といい、(7)においてsleeping and wakingを「眠ったり目覚めたりすること」という代りに「睡眠や目覚め」といっても何ら差支えないし、むしろその方が意味が明確である。即ち(2)、(3)、(7)においても動名詞は名詞と殆んど同じ意味を有していると考えて良いと思う。文の主語は文の主体となるものであり、述語の有する陳述に対する主体となるもの、つまり行為者又は行為物であるから、当然名詞化したものになるのではないかと思う。

以上よりして、動名詞が主語に用いられた場合は名詞化されたものであると考えて良いと思う。さて先に動名詞が本来有する名詞的意味と述べたが、動名詞seeingが「見ること」という意味を有する時は、この動名詞はsee「見る」という動詞の意味を有しているのであって、名詞の意味を有しているのではない。換言すると、seeingは動詞seeの名詞的意味を有する動名詞であると考えられる。名詞的意味と、名詞の意味とは異なっているのである。ところが、動名詞が更に意味上転じて名詞と同じく考えられ、いや実際に名詞としての品詞を有するようになったbuilding, feeling, thinking, liking, opening, breathing, etc.の如き場合は、最早や動名詞としての機能(文法上の)を失って、普通の名詞としての機能(文法上の)を有するに至ったと考えられるのである。さて、次に動名詞が目的語として用いられた場合を例を挙げて説明しよう。

## II 文において目的語として用いられた場合

- (1) They left records of their doings.
- (2) They obtained more knowledge by copying what they saw.
- (3) Would you mind explaining it to me?
- (4) He stopped smoking.
- (5) I finished the work though it was not to my liking.
- (6) He could not avoid pitching into the well.
- (7) None know the feelings of my heart.

以上の文の動名詞は何れも目的語となっている。文の目的語になるということは、他動詞の目的語か又は前置詞の目的語になるか何れかである。形容詞の目的語になる場合もあるが稀である。上例において(1), (2), (5)の場合は、何れも前置詞の目的語であり、その他の例は何れも他動詞の目的語となっている。さて、これらの場合においても又、前の I の場合と同じことがいえる。即ち上例中、(1), (5), (7)の場合の動名詞は何れも純粋なものではない。元來動名詞であったが、最早や名詞と考えて良いものである。(1), (7)の場合は形の上からも明確である。即ちそれぞれ複数形を取っている。又その前に冠詞を取っていることでも分るのである。従って、これらの場合を除いて(2), (3), (4), (6)の場合について考えて見よう。その何れの場合にも、動名詞本来の名詞的意味である「～すること」の意味を有している。(4), (6)の場合、各々「喫煙」「投入」という名詞の意味を用いても意味は通ずるが、矢張り「喫煙すること」「投入すること」と解釈して、動詞としての意味を用いた方が全体の意味は明確となる。

(2), (3)の場合のように、動名詞がその後目的語を支配する場合は特に動詞的意味が強いと考えられて名詞と同じ意味を有するのではない。

これは当然で、動名詞が後に目的語を支配する以上、その動名詞は他動詞としての機能を果すからである。(5)の場合は、動名詞が前置詞の目的語になった場合であるが、この場合も意味上この動名詞は「好み」という名詞の意味を有するので(1), (7)の場合と同じに扱って良いと思う。以上動名詞が他動詞の目的語となった場合も、前置詞の目的語となった場合も、要するに文において目的語として用いられた場合は、その動名詞が名詞化した場合(1), (5), (7)を除いては、動詞としての要素を強く有するといえると思う。

それでは次に、動名詞が補語として文中に用いられた場合について例を挙げて説明して見ようと思う。

### III 文において補語として用いられた場合

- (1) Seeing is believing.
- (2) The General Assembly is a sort of big town meeting of the world.
- (3) The retina is the inner living of the rear part of the eyeball.
- (4) His forte is painting desolate scenery.

以上において、(2), (3)の場合を除いて(1), (4)の場合は、本来の名詞的意味である「～すること」の意味を有する。(4)の場合は後に目的語を支配しているので動詞としての意味が強い。(2), (3)の場合は、I, IIの文において説明したと同様に動名詞の名詞化したものである。又上文の(1)の場合も動名詞は「信念」という意味でなくて「信ずること」という意味を有するので、矢張り動詞の意味を有するといえるのである。従って、動名詞が補語として用いられた場合も、動詞的要素を強く有すると考えられる。以上動名詞が果す文法上の役目について述べたのであるが、要約すれば、動名詞が名詞化した場合は別として、主語になる時は名詞化した場合と同じ意味を有し、目的語や補語となる時は、名詞的意味である「～すること」の意味を有するといえると思う。このことは前述した如く、動名詞は元來 O.E. (Old English) の -ung から出来たのであり、これは本来弱変化動詞から動詞の名詞 (Verbal noun) を作るのに用いられた。それが M.E. (Middle English) の初期から -ung は急速になくなり、-ing が規則的な形となり、一方 O.E. 末期から強変化動詞からも動詞の名詞が作られるようになり、一般動詞であれば殆んど如何なる動詞からも作られるようになった。この Verbal-noun なる名称からも分るように、動詞から出来た名詞形故、本来の動詞の性質を多分に有しているもので、現在においてもそ

の両面を有しているのである。現在の用法上名詞的性質としては、複数形を作ったり、冠詞や形容詞をつけたり、複合語として用いられったりすることであり、又動詞的性質としては、副詞的修飾語を取ったり、完了形、受動形を作ったり、目的語を取ったりすることである。

ただ文において動名詞が用いられた場合、即ち動名詞構文においては、以上述べた如く動名詞は夫々文における役目（文法上の）を有している。即ち主語、目的語、補語であり、それぞれ意味の上から動名詞の有する両面の意味である名詞的意味（～すること）と名詞と同じ意味を有するのである。ところで、今ここに問題となるのは、現代英語に用いられている動名詞の一形態が、或る場合には名詞的意味（～すること）に用いられ、他の場合には名詞と同じ意味に用いられている場合である。例をあげて説明することにしよう。即ち、

(A) The main object of newspapers is the informing of every day occurrence.

(A)において、動名詞 *informing* は未だ完全に名詞化したものではない。即ち他の名詞化した動名詞である *building*, *liking*, *thinking*, etc とは異なっている。何故なら、この *informing* は後に *every day occurrence* なる目的語を支配することにより、*informing* には他動詞としての要素が含まれているといえると思う。形の上から見ると、*every day occurrence* は前置詞 *of* の目的語と考えられるが、意味上はこの場合の *of* は *of* 以下の語をその前の他動詞（又はそれに類似するもの）の目的語とする目的格を示す *of* であるといえると思う。従って、*building*, *liking*, *thinking*, etc が 'to build' (建てること), 'to like' (好むこと), 'to think' (考えること) という意味から転じて、「建物」「好み」「思想」という純粋名詞の意味となった場合とは異なっている。にもかかわらず、(A)においては、*informing* は *the* なる定冠詞を取り、普通の名詞と何んら形において変りはないし、*the informing* の代りに *the news*, 又は *the report* なる語を置き換えても何ら差支えないと考えられるが、以上述べた如く、意味上は *informing* はやはり他動詞としての意味を有する動名詞と考えられるのである。それでは今、(A)において動名詞 *informing* の含む他動詞の意味をもつと強く表現しようとするれば如何なる文になるであろうか。ここに第二の文が考えられると思う。即ち、(B) *The main object of newspapers is informing every day occurrence.* (A)と比較すると、*informing* の前の定冠詞と、その後の前置詞 *of* とを欠いている。そして直接 *Be* 動詞と結びついて補語の役目を果している。この場合、*informing* は純粋の動名詞であり、「報道すること」という名詞的意味を有している。そして、*every day occurrence* なる語句を直接目的語とする他動詞の役目を果しているのである。それと同時に、*Be* 動詞の補語（主格）となっているのであるから、名詞としての役目（文法上の）も果しているのである。さて先に(A)においては、*informing* は後に *every day occurrence* なる目的語を支配するので、他の名詞化した動名詞である *building*, *liking*, *thinking*, etc とは異なると述べたが、形態上、*of* phrase (句) が後に来るので、名詞と同じであると考えて良いと思う。ただ意味上は未だ動詞の意味を幾分有していることは前述の通りである。従って(A)において、*informing* は純粋に名詞化した動名詞ではないが、その前に冠詞を有し、後に *of* phrase を取ることにより、名詞化されたものと考えて良いと思う。何故なら、若し(A)において *informing* が普通の動名詞の有する動詞的要素をもつと強く有するならば、定冠詞も、前置詞 *of* も欠いた(B)の文となるからである。それ故に、(A)における *the informing of* ~ なる語句における *informing* は動名詞の名詞化されたものと考えて良いと思う。

さてここで動名詞構文を調べる際に最も問題となるのは動名詞付対格構文である。動名詞付対格構文とは動名詞を伴う対格が動詞又は前置詞の目的語となる構文である。英語では現在

対格の形はないので、対格の名で呼ばれているものは名詞の通格（主格）、代名詞の目的格で、これが動名詞の意味上の主語をなしている構文のことである。即ち、

Do you like me staying with you ? (A)

He had no objection to some of them listening. (B)

(A)においては me は目的格であり、(B)においては some of them が目的格となっている。ところで現代英語では動名詞と分詞とは形において全く同じであり、即ち動詞の原形+ing 形であるので上例(A)、(B)において staying, listening を夫々分詞と考えても良いのではないかとと思われるが、意味上(A)において、好むのは私ではなくて、私があなたと共に居ることであり、又(B)において、反対は彼等のいく人かに対してではなくて、彼等のいく人かが聞くことに対してである。それ故上例は何れも 動名詞付 対格構文であって、分詞付対格構文ではないのである。そしてこの動名詞付対格構文は動名詞の動詞的性質が強くなったことを示すのであり、次に述べるような文即ち、I insist upon Miss Sharp's appearing. のような「所有格+動名詞」の場合の動名詞は、「対格+動名詞」の場合の動名詞より、動詞的性質が弱く、名詞的性質が強いと言えるのである。それでは「対格+ing」構文は、常に動名詞構文かというところではない。「対格+ing」が「主語+述語」関係にあり、それ以外の関係を表わさない場合は動名詞構文であるが、「主要語+修飾語」関係にある場合は現在分詞構文と言って良いと思う。即ち、

They saw hunters coming over the field with many hounds. なる文も hunters who were coming over the field.....の意味であれば現在分詞を含むといえるのである。

ところが、「対格+ing」が「主語+述語」を表わすのは、-ing が動名詞である場合に限りてはいない。例えば、I saw the man crossing the road. なる文においては「主語+述語」の関係があると考えるのが自然であり、しかもこの-ingは一般に現在分詞として認められている。即ち「対格+現在分詞」と一般に認められているものは、「主語+述語」の関係を表わすこともあり、又「主要語+修飾語(句)」の関係を表わすこともあるといえる。動名詞は元来その前に名詞、代名詞の所有格の形を意味上の主語として取って来たのだが、次第に名詞の場合に 's を失い、普通の主格の形を取り、又代名詞の場合目的格の形に変わって来たために、動名詞付対格構文が出来て、現在分詞付対格構文と混同してまぎらわしくなって来たのである。又何度も言うように、動名詞と現在分詞とは、その形が現在全く同じであり、ただ意味上動名詞は名詞的意味を有し、現在分詞は形容詞的意味を有する区別があるだけである。従って文法書によっては、その両者を ing形として特別に区別しない場合もあるくらいである。しかしこれを区別するからにはやはり意味上前述した如く区別するのが正しいと思う。ただ言えることは、動名詞は元来 Verbal-noun と言われた如く、動詞的性質と名詞的性質を有して来たのであり、現在もたしかにその両方の用法を有していると言える。しかし前述の如く、動名詞が主語として用いられた場合や、補語や目的詞として用いられた場合も（この場合特にその前に定冠詞や形容詞をつけて、後に of+名詞(句)をつける）名詞化する傾向が生じて来たことを考えると、動名詞本来の有する名詞的性質が強くなって来たように思われる。しかし一方では動名詞付対格構文のように動詞的性質が-層強く感ぜられる場合もあるので断定することは出来ない。

動名詞は動詞と名詞との性質を木だ半々の状態で有していると考えるのが一番妥当な考えではないかと思う。しかし将来はだんだんと動詞的性質を失って純粹の名詞と同じくなる。即ち動名詞の名詞化の傾向に進むのではないかと考えるのである。以上現代英語における動名詞構文についての私見を述べた次第である。